

# 一丁田遺跡

2006年

日田市教育委員会

## 序 文

一丁田遺跡は、天領期に日田の経済の中心として栄え、今なお永山城の城下町としての景観が残る豆田の町並みのすぐ西側、花月川左岸の沖積地でもやや微高地上に位置します。

今回の調査は宅地分譲に伴う狭い調査範囲ではありましたが、弥生時代後期から古墳時代初期、古墳時代後期の住居跡や溝、それに伴う多量の土器類が発見されるなど、貴重な成果を取ることができました。

こうした発掘調査の成果をまとめた本書が、これからの文化財の保護や地域の歴史の解明、さらには学術研究等や学校教育資料などにご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、調査にご協力いただきました関係者の方々、作業に従事いただきました皆様方に対して、心から厚くお礼を申し上げます。

平成18年3月

日田市教育委員会

教育長 諫 山 康 雄

## 例 言

1. 本書は、日田市教育委員会が平成17年度に実施した一丁田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査区一帯は周知の埋蔵文化財包蔵地である日田糸里跡に含まれるが、今回の発掘調査の結果、糸里跡は確認できず、弥生時代～中世の集落遺跡であることが明らかとなったことから、遺跡名称として不適当と判断される。そこで調査終了後、一丁田遺跡として新発見遺跡の登録手続きを行った。
3. 調査は、分譲住宅建設に伴い、有限会社双美工務店の委託業務として、日田市が受託し、日田市教育委員会が事業主体となり実施した。
4. 調査にあたっては、岩尾信子氏、(株)博井建設、(株)ランドマップのご協力を得た。
5. 調査現場での実測は渡邊・矢羽田、写真撮影は渡邊が行った。
6. 空中写真は㈱九州航空に委託し、その成果品を使用した。
7. 本書に掲載した遺物実測は矢羽田が行い、一部を渡邊、雅企画有限会社の委託によるものを使用した。遺構・遺物の製図は矢羽田のほか、中川照美（文化財保護課調査補助員）の協力を得た。
8. 遺物の写真撮影は、長谷川正美氏（雅企画有限会社）の撮影による。
9. 挿入中の方位は全て磁北を示す。
10. 写真真図版の遺物に付した数字番号は、全て挿入番号に対応する。
11. 出土遺物及び図面、写真類は日田市埋蔵文化財センターにて保管している。
12. 本書の執筆・編集はⅡを矢羽田、Ⅰ、Ⅲ、Ⅳを渡邊が行い、全体の編集は矢羽田が行った。

## 目 次

I 調査に至る経過と組織	1
II 遺跡の立地と環境	2
III 調査の記録	
(1) 調査の概要	3
(2) 遺構と遺物	3
IV まとめ	16

## 挿 図 目 次

第1図 調査区位置図 (1/4000)	1
第2図 周辺遺跡分布図 (1/25000)	2
第3図 遺構配置図 (1/200)	3
第4図 1号住居実測図 (1/60)	4
第5図 1号住居カマド実測図 (1/30)	4
第6図 1号住居出土遺物実測図 (1/3・1/4)	4
第7図 2号住居実測図 (1/60)	5
第8図 2号住居出土遺物実測図① (1/4)	6
第9図 2号住居出土遺物実測図② (1/4)	7
第10図 3号住居実測図 (1/60)	8
第11図 3号住居出土遺物実測図 (1/4)	9
第12図 4～6号住居実測図 (1/60)	10
第13図 4～6号住居出土遺物実測図 (1/4)	10
第14図 1号土坑実測図 (1/30)	11
第15図 1号土坑出土遺物実測図 (1/4・1/6)	12
第16図 1～3号溝実測図 (1/40)	13
第17図 4号溝実測図 (1/40)	14
第18図 1号掘立柱建物実測図 (1/60)	14
第19図 溝・掘立柱建物・柱穴 出土遺物実測図 (1/3・1/4)	15



田子町の位置

## 図 版 目 次

図版1 上段 調査区遠景 (吹上台地を望む)	
下段 調査区全景 (真上から)	
図版2	
① 1号住居 (南から)	
② 2号住居 (北西から)	
③ 2号住居遺物出土状況	
④ 2号住居遺物出土状況	
⑤ 3号住居 (北西から)	
⑥ 3号住居遺物出土状況	
⑦ 4号住居 (北から)	
⑧ 5号住居 (北から)	
図版3	
① 6号住居 (南から)	
② 1号土坑 (南から)	
③ 1号土坑遺物出土状況	
④ 1号溝 (南西から)	
⑤ 2号溝 (南から)	
⑥ 3号溝 (南から)	
⑦ 4号溝 (東から)	
⑧ 1号掘立柱建物 (西から)	
図版4 出土遺物	
図版5 出土遺物	

本文写真目次	
写真1 調査風景	
写真2 1号溝土層	
写真3 2号溝土層	
写真4 3号溝土層	
写真5 4号溝土層	
写真6 発掘調査に参加された皆さん	

## 表 目 次

第1表 遺構変遷表	16
第2表 出土土器観察表	18
第3表 出土土製品観察表	18

## I 調査に至る経過と組織

平成17年1月12日付で岩尾信子氏より市教育委員会に日田市港町445-1及び509-1ほかで宅地分譲地造成工事に先立つ事前の照会文書が提出された。この開発予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地である日田条里に該当し、川の対岸には永山布政所跡、月隈横穴墓群などの遺跡が所在し、また花月川の沖積地でも微高地にあたるなど、遺跡の所在する可能性が高いことから、その取り扱いについて協議をいただく旨の文書回答を行った。その後の1月24日には岩尾氏より予備調査依頼が提出され、これを受けて2月14日に機械による試掘調査を行ったところ、445-1の箇所では遺跡の存在は確認出来なかったが、509-1の箇所からは土坑、溝、柱穴などが検出され、弥生土器などの遺物が発見された。

こうした結果をもとに、開発主と遺跡の取り扱いについての協議を重ねたところ、予定地の造成は全面盛土工法にて行われるものの、造成地内上下水道配管施設を伴う位置指定道路が設置されることから、遺跡の保存は困難であると判断し、農地転用許可後の4月に道路部分約330㎡の発掘調査を実施することとなった。その後、土地転売により事業主となった有限会社双美工務店と平成17年4月21日に委託契約を取り交わし、4月27日から5月24日の間発掘調査を実施した後、5月17日～6月30日の間整理作業を実施し、報告書作成を行った。調査に関する日誌は以下のとおりである。

- 4月27日 機械を用いて表土除去、作業員による遺構検出を行う。
- 4月28日 住居群、溝の存在が明らかとなり、遺構の掘下げを開始する。
- 5月23日 遺構の掘下げ、実測作業が完了し、空中写真撮影を行う。
- 5月24日 機材の片付け・撤収を行い、調査を完了する。

なお、調査組織は次のとおりである。

調査主体	日田市教育委員会
調査責任者	諫山康雄（日田市教育委員会教育長）
調査統括	後藤清（同文化財保護課課長）
調査事務	高倉隆人（同文化財保護課課長補佐兼埋蔵文化財係長）、伊藤京子（同専門員） 中村邦宏（同主事補）
調査担当	渡邊隆行（同主任）、矢羽田幸宏（同主事補）
調査員	土居和幸（同副主幹）、今田秀樹（同主任）、行時桂子（同主任） 若杉竜太（同主任）
調査作業員	河津定雄、五反田静子、筒井英治、財津利枝、財津由太、高倉富美子、高村三郎 原口勝利、平原知義、行村シズエ
整理作業員	鍛冶谷節子、平川優子



第1図 調査区位置図(1/4000)



写真1 調査風景

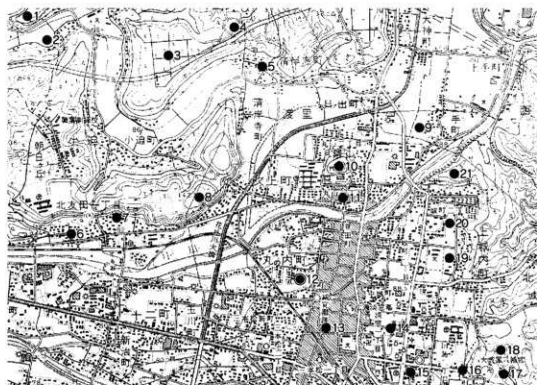
## II 遺跡の立地と環境

遺跡は日田盆地のほぼ中央部に位置し、字名の「一丁田」は古代の条里制に由来する地名と言われている。遺跡より南50m程の箇所は、試掘調査の結果から、旧河道であったことが判明しており、本来遺跡周辺は、北側を流れる花月川に挟まれた沖積微高地であったことが窺える。この一帯は、現在住宅が立ち並ぶ状況にあるが、すぐ東側には江戸時代以降下町として栄えた豆田の町並み、北に西国筋郡代所であった永山布政所跡、その背後に月隈横穴墓群、丸山城が造られた月隈山、南に私塾成宜園跡が所在するなど江戸期の景観が随所に見られる地域でもある。

周辺の遺跡を見てみると、永山布政所跡では古墳時代の溝が、日田条里四反畑地区では古代から近世にかけての土坑や水田層が確認されるなど、これまで治水が悪く、存在しないと考えられてきた沖積地に、近年の調査で遺跡が確認されている。また、慈眼山丘陵周辺には大蔵氏の居城と推定される大蔵古城跡、墨書土器が出土し区画大溝や井戸が確認された慈眼山瀬戸口遺跡、溝や井戸などが確認された上ノ馬場遺跡、中世の建物群が確認された日田条里上手地区などが所在する。大原丘陵周辺には、古墳時代～古代の溝や住居が確認された日田条里飛矢地区、古代の墨書土器が出土した大波羅遺跡、丘陵上には古墳時代の墳墓群が確認された赤迫遺跡、直径35mの大型円墳の薬師堂山古墳が点在する。さらに、西側の吹上台地上には、多彩な副葬品を持つ甕棺墓群や環濠集落が確認された吹上遺跡、台地崖面には北友田横穴墓群、台地の縁には弥生後期の住居が確認された今泉遺跡が所在する。北西の辻原台地上には、環濠集落から古墳時代の居館への変遷を知ることができる小迫辻原遺跡、谷を挟んで多数の墳墓群を持つ草場第2遺跡、台地裾部には弥生後期～古墳時代の住居群が確認された本村遺跡などが所在し、さらに奥の宮ノ原台地の端には2基の前方後円墳から構成される朝日天神山古墳群、その眼下には弥生時代終末から古墳時代の集落が確認された尾部田遺跡が所在する。

### 〔参考文献〕

- 田中博介編 『小迫辻原遺跡Ⅰ』九州横断自動車道建設促進協議会文化財調査報告書10 大分県教育委員会 1999  
土屋和幸編 『環上遺跡Ⅰ』日田市歴史文化財調査報告書第12巻 日田市教育委員会 2003  
渡邊隆行編 『永山布政所跡Ⅱ』平成15年度（2003年度）日田市歴史文化財年報 日田市教育委員会 2004  
土屋和幸編 『日田条里四反畑地区』日田市歴史文化財調査報告書第46集 日田市教育委員会 2003 ほか



第2図 周辺遺跡分布図 (1/25000)

- 1 朝日天神山古墳群
- 2 尾部田遺跡
- 3 史跡小迫辻原遺跡
- 4 草場第2遺跡
- 5 本村遺跡
- 6 今泉遺跡
- 7 北友田横穴墓群
- 8 吹上遺跡
- 9 日田条里上手地区
- 10 月隈横穴墓群、丸山城
- 11 永山布政所跡
- 12 一丁田遺跡
- 13 史跡成宜園跡
- 14 日田条里四反畑地区
- 15 日田条里飛矢地区
- 16 大波羅遺跡
- 17 薬師堂山古墳
- 18 赤迫遺跡
- 19 上ノ馬場遺跡
- 20 慈眼山瀬戸口遺跡
- 21 大蔵古城跡

### Ⅲ 調査の記録

#### (1) 調査の概要 (第3図)

今回の調査は試掘調査の結果を踏まえて、遺構検出面まで機械で掘り下げを行い遺構の確認を行った。調査区は東西約45m、南北約5mの面積約330㎡の範囲で、標高約83.1mを測り、ほぼ平坦な地形であった。遺構検出面は現況水田基盤土直下の淡黄褐色・暗黄褐色及び明褐色の砂質土であった。

調査において検出された遺構は住居6軒、土坑1基、溝4条、建物1棟、柱穴多数である。これらの遺構埋土は暗灰褐色土（1～6号住居、1号土坑、2・4号溝）、黒褐色土（調査区中央部柱穴群）、灰色土（2号溝、1号建物）、淡黄褐色土（1号溝）の4種類が見られた。遺構の多くは調査区中央部より西側に集中しており、調査対象地北西側の住宅建設の際に多量の土器が出土したとの周辺住民の証言から、西側への密度の高い遺構の広がりが予測される。

#### (2) 遺構と遺物

調査区において検出された遺構について説明する。

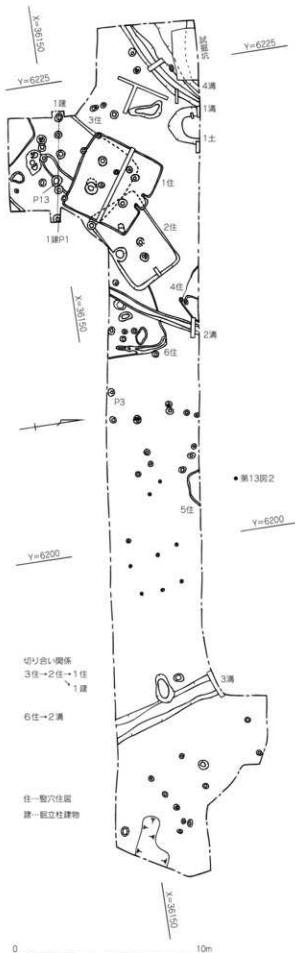
##### 1号住居 (第4・5図、図版2)

調査区西側にて検出された住居で、上面の削平が著しく、2・3号住居を切っている。確認面での規模は南北約4.3m、東西約4.3m、深さ約5cmを測り、平面形は方形を呈する。床面は貼床が貼られ、部分的に地山整形であった。深さ約30cmの主柱穴が4穴見られる。

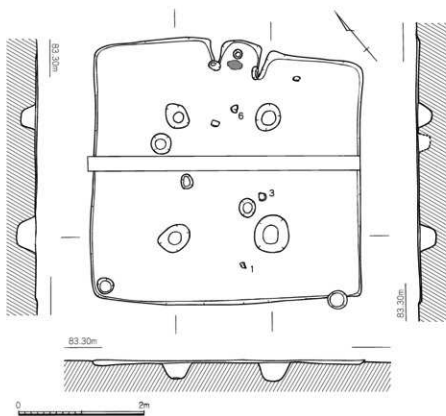
カマドは住居跡北東壁にやや角度がずれて付設される。住居壁より上面を欠くものの、地山作り出しと想定される両袖が一部残存し、袖石、支脚の抜き取り痕が確認された。両袖間の距離約50cm、両袖の長さ約50cmを測り、支脚手前部分の熱を受けた箇所が火床面である。

##### 出土遺物 (第6図、図版4)

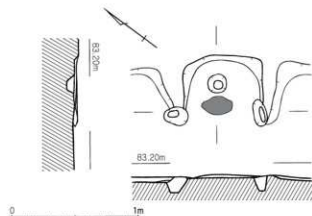
5は2号住居の柱穴から、2・4・11は3号住居及び柱穴から出土している。1号住居が上面に重なっていることから、床面、柱穴の一部掘り残しによる遺物の混入と判断し、1号住居出土遺物として報告する。1・2は須恵器坏蓋である。1は天井部にヘラ記号が残り、2は



第3図 遺構配置図 (1/200)



第4図 1号住居実測図 (1/60)

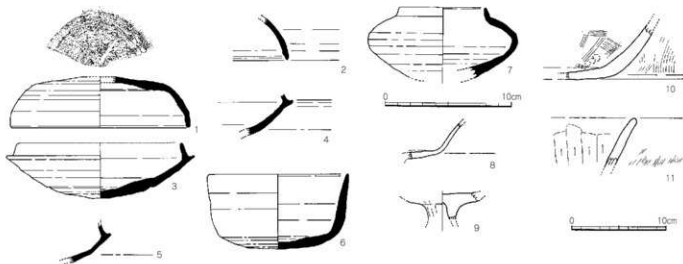


第5図 1号住居カマド実測図 (1/30)

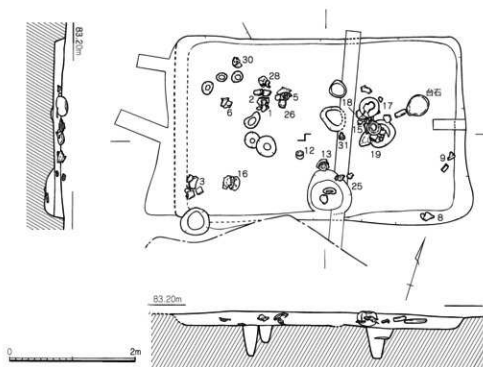
口唇部内面に段を有する。3～5は須恵器坏身である。かえりを持ち口縁部は上方に立ち上がる。4・5は口縁端部を欠く。6は深さのある須恵器坏である。口縁部は直線的に立ち上がる。7は須恵器短頸壺である。胴部上面までヘラケズリが通る。8は土師器高坏、9は土師器高坏脚部である。10は土師器甕の底部でやや平底気味である。11は土師器甕である。口縁部は大きく外に開き、内面にはケズリが施される。

2号住居 (第7図、図版2)

調査区西側にて検出された住居で1号住居に切られ、3号住居を切っている。西側は、当初3号住居との切り合いを把握出来ていなかったため、掘りすぎてしまっている。確認面での規模は東西長軸約4.6m、南北短軸約2.9m、深さ約25cmを測り、平面形は長方形を呈する。床面は地山



第6図 1号住居出土遺物実測図 (1/4) ※1～7は1/3



第7図 2号住居実測図 (1/60)

整形で、南側に南面土坑、中央部に炉跡、深さ約50cmの主柱穴が東西に2穴見られた。炉跡は明確な硬化面が確認出来ないものの、浅い凹みの中に焼土の混じる炭層が確認されたことから、炉跡と判断した。東側には台石が置かれ、住居床面直上の全面に、完形あるいは口縁部のみなど

の土器類が、散乱あるいは倒立(12・17)していた。特に東側主柱穴上面に15や19などのほぼ完形の土器類が打ち割られて散乱している状況は、主柱穴抜取り⇒柱穴埋め戻しの後にこれらの土器類を廃棄したことを想定させる。

#### 出土土物 (第8・9図、図版4・5)

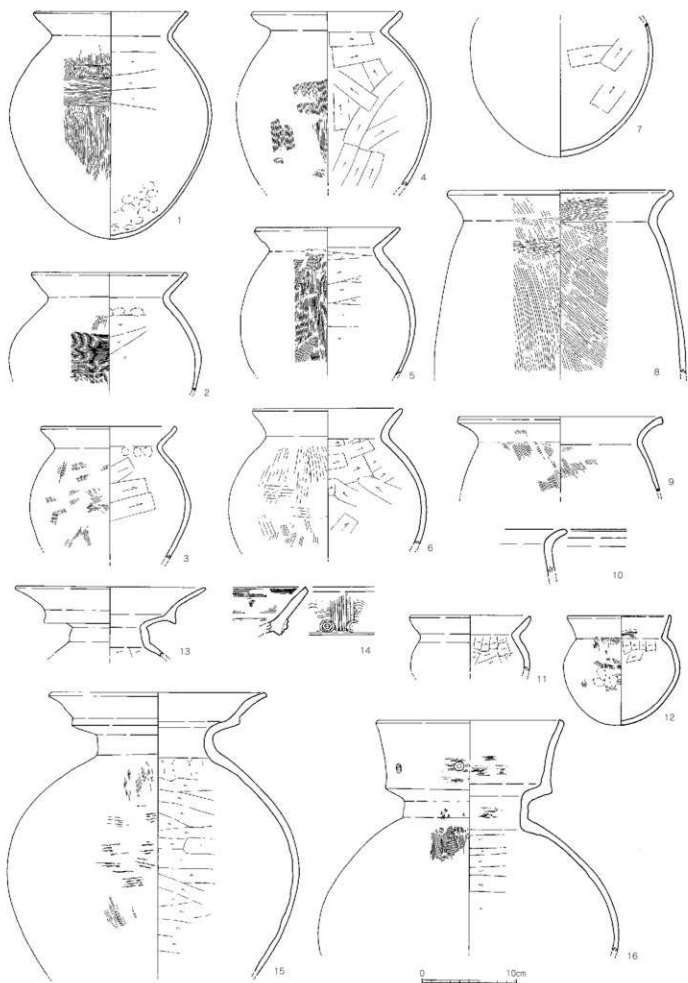
1～10は土師器である。このうち、1～4の口縁部は若干内湾気味に外傾し、端部はややシャープさに欠けるが、上面に突出する。頸部は1～3が口縁部付根の内面直下にもうひとつ稜が形成され、4は鋭い稜をなす。特に1・4の器壁は薄く、胴部はいずれも丸く張り出す。底部は1に残存し、やや尖底気味をなす。内面にはいずれもケズリが施される。5は内湾する口縁部を持ち、口縁部付根の内面直下にもうひとつ稜が形成される。6は口縁部が直線的に立ち上がるものの、頸部の屈曲はシャープさに欠ける。7は若干尖底気味を呈する底部である。8は口縁部が外反し端部をつまみあげる長胴甕で、外面にタタキが残る。9は口縁部が緩やかに外反する甕であり、胴部はあまり張り出さず、外面には縦ハケが残る。10は口縁部が小さく外反する甕である。

11・12は小形甕あるいは小形丸底壺か。11は若干内湾気味を呈し、12は口縁部が直立する。頸部はケズリによりシャープに作り出される。

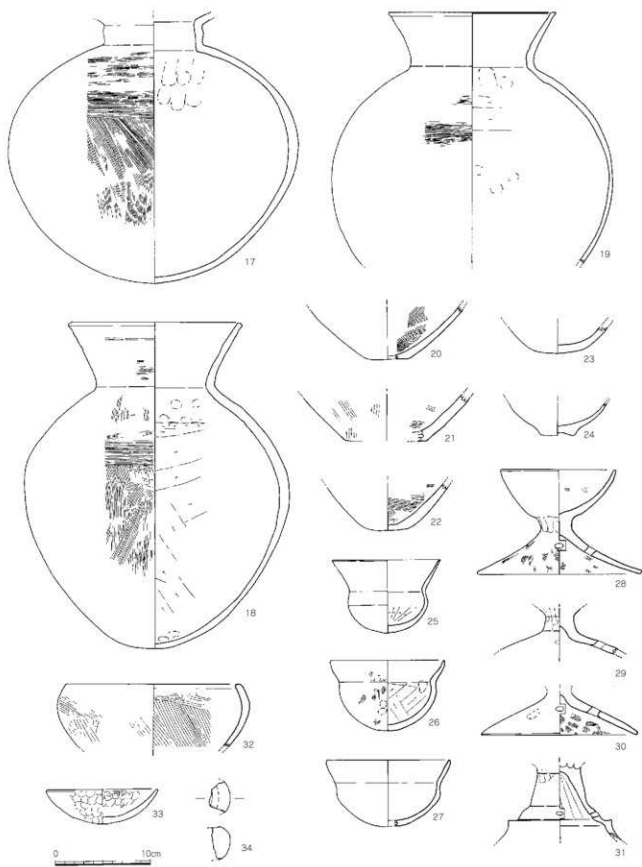
13～19は壺である。うち、13～17は二重口縁壺で頸部は筒状を呈する。13～15は口縁部が大きく外に開く。14は口縁部外面に凹形浮文が貼りつけられ、ハケを波状に施し、浮文間には縦ハケを施している。16は口縁部が直線的に立ち上がり外反し、擬口縁部上面に竹管文が6穴巡る。17は口縁部形態は不明であるが、残存状況から二重口縁壺と想定される。胴部は大きく張り出す楕円形を呈し、底部は丸底である。18・19は口縁部が直線的に長く開く広口壺である。胴部は張り出す円形を呈し、底部は丸底を呈する。19は端部をやや外に張り出す。

20～24は底部で、20～22はレンズ底を呈し、23は丸底気味、24は底部を作出し、上げ底状を呈する畿内第5様式か。25～27は小形丸底壺である。口縁部が直線的に長く伸びて外に開く25と口

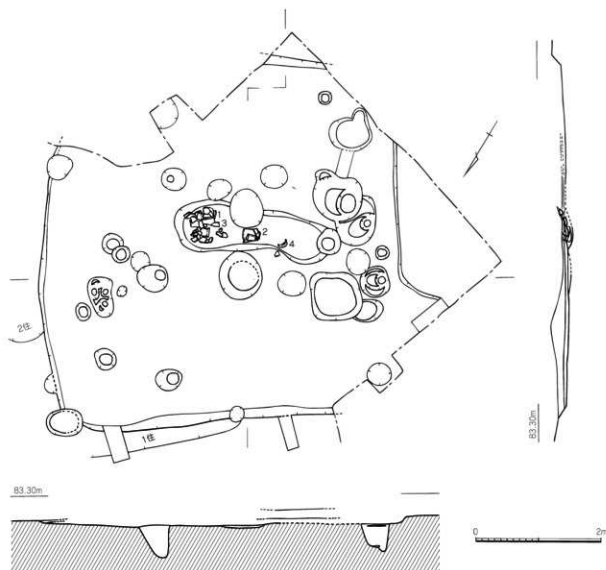




第8图 2号住居出土土物实测图①(1/4)



第9图 2号住居出土遺物実測図② (1/4)



第10図 3号住居実測図 (1/60)

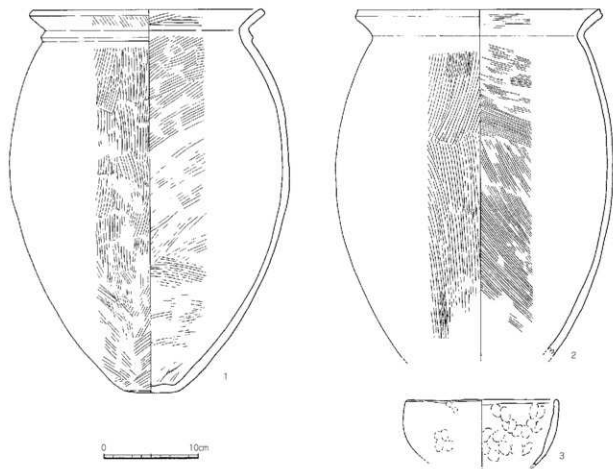
縁部が短く内湾する26・27に区分される。28～30は低脚坏である。28は坏口縁部がなだらかに内湾し、脚部はなだらかに外に開く。穿孔が3穴巡る。29・30は脚柱部が明瞭に作られ、外に開くタイプか。31は脚部に段を有する高坏で、穿孔が施される。32・33は鉢である。32は底が深く、口縁部が内傾する。33は底の浅い器形で、指オサエが全面に残る。34は不明土製品である。土玉か。

1～7、11～15、17～19、24～30は織内系、16は山陰系、8～10、20～23、32、33は在地系と考えられる。

### 3号住居 (第10図、図版2)

調査区西側隅にて検出された住居で1・2号住居、1号建物に切られる。調査区隅にかかっているためその全体形状は明瞭ではない。調査区内の南隅の段が南東側壁、南東側の段は北西側などの壁面より若干レベルが高いためベッド状遺構と捉えたが、南面土坑は確認できず、炉跡の明瞭な痕跡も確認出来なかった。竪穴状遺構の可能性も考えられる。

確認面での規模は東西長軸約7.3m+α、南北短軸約5.7m、深さ約15cmを測り、平面形はかなり規模の大きい長方形を呈する。床面は地山整形で、南西側にベッド状遺構を有する。中央部には長楕円形の浅い落ち込みが見られ、ほぼ完形の土器が破損した状態でまとまって廃棄されていた。この落ち込みの北側左右には主柱穴と想定される深さ約50cmの柱穴が2穴見られた。



第11図 3号住居出土遺物実測図(1/4)

#### 出土遺物 (第11図、図版5)

1・2は甕で、口縁部がくの字状に屈曲する。1は頸部に断面三角形の突帯が巡り、胴部はやや張り出し、底部はレンズ底を呈する。2は1とほぼ同様の器形を呈するが、頸部に突帯が巡らない。3は鉢で内外ともに指オサエが明瞭に残存する。

#### 4号住居 (第12図、図版2)

調査区西側にて検出された住居で、2号住居に近接する。上面の削平が著しく、不明瞭である。土坑等の可能性もあるが、プランが方形を呈し、やや大きいことなどから住居として報告する。確認面での規模は南北約2.2m+ $\alpha$ 、東西約1.4m+ $\alpha$ 、深さ約2cmを測り、平面形は方形と想定される。床面は地山整形で、南東側に一段の落ち込みを有し、この箇所より遺物が出土した。

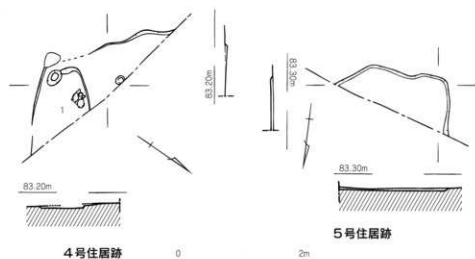
#### 出土遺物 (第13図、図版5)

1は甕である。口縁部はくの字に屈曲し、胴部は張り出さず胴部下面にはタタキが施される。

#### 5号住居 (第12図、図版2)

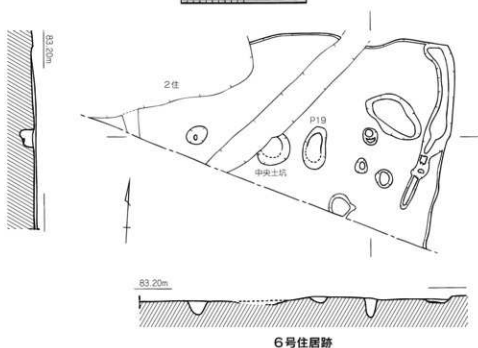
調査区中央部にて検出された住居である。上面の削平が著しく、プランは不明瞭である。土坑等の可能性もあるが、方形を呈すること、周辺の基盤土から土器片が出土していることなどからここでは住居として報告する。確認面での規模は南北約1.0m+ $\alpha$ 、東西約1.8m+ $\alpha$ 、深さ約3cmを測り、平面形は方形と想定される。床面は地山整形である。

また、この北側約1m程の基盤土中に同一個体のまとまった破片が採集され、この住居に伴う可能性が高いことから出土遺物として報告する。(第3図中表記)



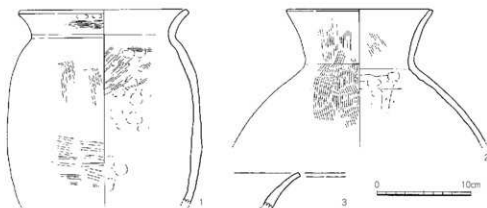
4号住居跡

5号住居跡



6号住居跡

第12図 4~6号住居実測図 (1/60)



第13図 4~6号住居出土遺物実測図 (1/4)

### 出土遺物

(第13図、図版5)

2は土師器大口壺である。口縁部は直線的に立ち上がり、外傾する。外面には縦ハケ、内面にはケズリが施される。

### 6号住居

(第12図、図版3)

調査区西側にて検出された住居で、2号溝に切られる。上面の削平が著しく、プランが不明瞭であったため、当初は柱穴群として掘下げを実施した。その後、P19が浅く、炭が多く混じることから炉跡、東・北側の若干の段が壁と判断され、住居と想定した。確認面での規模は南北約3.3m+ $\alpha$ 、東西約5.8m+ $\alpha$ 、深さ約2cmを測り、平面形は方形と想定される。床面は地山整形で、炉跡の東西には深さ約20~30cmの主柱穴が2穴ならぶ。

### 出土遺物 (第13図)

3はP19の炉跡より出土した甕である。口縁部が外反する。

### 1号土坑

(第14図、図版3)

調査区西側より検出された土坑である。1

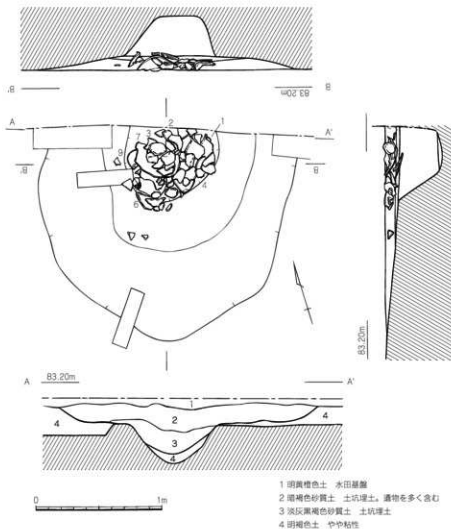
号溝が浅いため切り合いは判然としなかった。確認面での規模は南北軸約1.7m+α、東西軸約2.0m、深さ約10cmを測り、平面形は楕円形を呈する。断面は浅いレンズ状を呈し、中央部に約20cm程の落ち込みが見られる。なお、中央部の落ち込みの底は砂質のため柔らかく、若干掘りすぎてしまった。遺物は概ね2層のなかに多く見られ、3層には若干の破片が見られる程度であった。これらの遺物の多くはほぼ破損状態で、別個体の破片同士が折り重なっていた。数個体の土器を破壊してから一括廃棄したものと考えられる。この廃棄状況や穿孔のある土器の存在などから祭祀行為が想定される。

#### 出土遺物 (第15図、図版5)

1～4は弥生土器甕である。口縁部がくの字状に屈曲し、胴部は若干張り出す。底部はレンズ底を呈する。5～7は同一個体と思われる大形の甕である。5は口縁部をくの字状に外反させ、頸部に断面逆台形状の突帯が巡る。6は胴部が若干張り出し、頸部及び胴部下半に断面逆台形状の突帯が巡る。7は底部片で胴部が大きく外に開き、レンズ状底を呈する。8は壺で口縁部が上方に立ち上がり、頸部に刻目突帯が巡る。9は壺あるいは甕で、胴部は張り出し、底部はレンズ状を呈する。胴部下半に穿孔が施される。

#### 1号溝 (第16図、図版3)

調査区西側で検出された南西から北東方向に伸びる溝である。調査区内での規模は約5.9m、幅は



第14図 1号土坑実測図 (1/30)

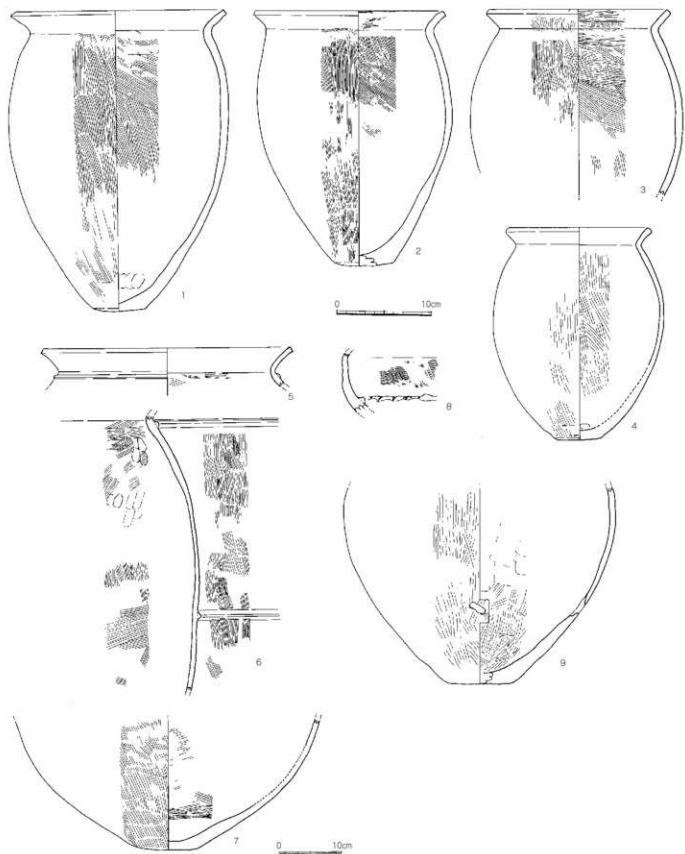
広いところで90cmを測る。断面形は浅いレンズ状を呈し、中央部付近が10cm程度と最も深い。南西及び北東方向は浅いため、溝の流れは不明である。

#### 出土遺物 (第19図)

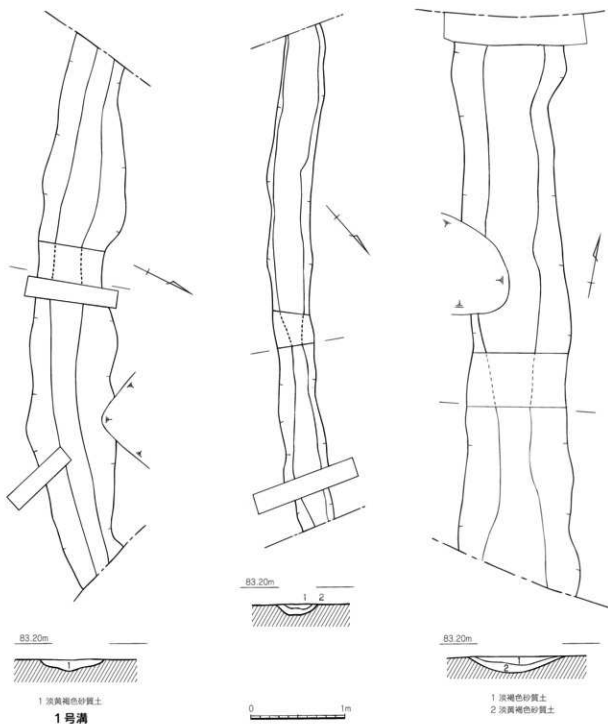
1は弥生土器鉢か。外面にはタタキが残り、内面にはハケが施される。

#### 2号溝 (第16図、図版3)

調査区中央部よりやや西側で検出された溝で、6号住居を切っている。南西から北東方向に伸び、調査区内での規模は約5.3m、幅は広いところで50cmを測る。深さは10cm程度で、断面形は浅い逆台形状を呈し、淡灰色土の埋土に鉄分の沈殿が顕著であった。溝床面には鉄分がびっしりと付着していたこ



第15図 1号土坑出土遺物実測図(1/4) ※5~7は1/6



第16图 1~3号溝实测图 (1/40)



写真2 1号溝土層

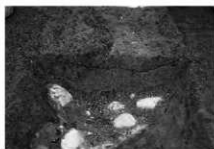


写真3 2号溝土層



写真4 3号溝土層





第17図 4号溝実測図 (1/40)

とから、かなりの水流が予測される。床面レベルに差が殆ど見られないため溝の流れは不明である。

#### 出土遺物 (第19図)

2は弥生土器片である。器台の底の部分か。3は須恵器甕の破片か。外面には格子目タタキが施され、内面には青海波状のタタキが施される。

#### 3号溝 (第16図、図版3)

調査区東側で検出された溝である。南北方向に伸び、調査区内での規模は約6.0m、幅は広いところで1.3mを測る。深さは20cm程度で、断面形は浅いレンズ状を呈する。床面レベルに差が殆ど見られないため溝の流れは不明である。

#### 出土遺物 (第19図)

4は弥生土器甕の口縁部か。口縁端部を跳ね上げる。

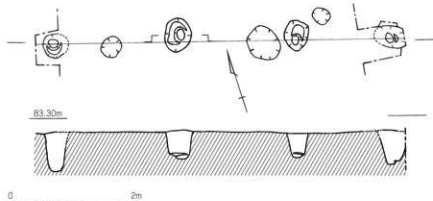
#### 4号溝 (第17図、図版3)

調査区西隅で検出された溝で、南西から北東方向に伸びている。試掘調査時に溝内部を掘り下げたため大部分が掘り



写真5 4号溝土層

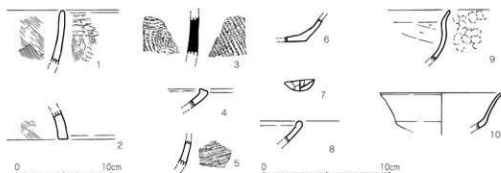
すぎている。調査区内での規模は長軸4.3m、幅は広いところで2.4m+αを測る。深さは80cm程度で、断面形は逆台形状を呈する。埋土の堆積は互層のブロック状を呈し、2～7層は次第に埋没していった層と考えられる。9層は粘性が高く、水流に伴う沈殿の可能性が考えられ、8層は小礫が含まれることから、9層埋没後の水流を示すものか。この状況から、複数回に渡り埋没と水流を繰り返していたものと考えられる。



第18図 1号掘立柱建物実測図 (1/60)

#### 出土遺物 (第19図)

5は弥生土器片である。外面にはハケメが施される。



第19図 溝・掘立柱建物・柱穴出土遺物実測図(1/4) ※6～8は1/3

### 1号掘立柱建物 (第18図、図版3)

調査区西側に検出された建物で、3号住居を切っている。調査区内では4穴が確認でき、南側に展開することが予測される3間+ $\alpha$ の建物である。柱穴間の距離は約1.8mを呈し、深さは約40～60cmを測る。

### 出土遺物 (第19図)

6・7はP1より出土した。6は土師器皿、7は手捏土器である。

### 柱穴 (第3図)

調査区南西隅と中央部に密集しているが、1号建物以外は見られない。特に中央部は黒褐色土の柱穴、南西隅は灰色土の柱穴が多く見られた。

### 出土遺物 (第19図)

8・9はP13より出土した。8は軸の施される磁器片で、碗か。9は小形丸底壺の破片である。10はP3より出土した土師器高坏である。口縁部は緩やかに外反し、坏底部が明瞭に屈曲する。



写真6 発掘調査に参加された皆さん

#### IV まとめ

前章において解説を加えた遺構の時期について述べたうえで、遺構及び遺跡の性格について検討を行う。

3号住居、1号土坑の甕は口縁部がくの字状に屈曲し、頸部に突帯を持ち胴部は張り出さず、底部はレンズ底を呈するなどの特徴を有することから、弥生後期前半～中頃の範疇に収まり、また、1号土坑の大型甕は成人用甕棺墓に使われるサイズのもので、橋口氏の編年Ⅳ期並行<sup>(註1)</sup>と考えられることから概ね弥生後期前半～中頃と考えられる。

次に、2号住居であるが、特に遺物の出土量が多く、一括廃棄の可能性があることからそのセット関係をもとに時期を検討する。一部の甕に口縁部が直線的で底部が尖底を呈するなどの庄内系の特徴を若干残すものが見られるが、殆どの甕では口縁部が若干の内湾を呈することなどから布留系でも古段階に含まれる。壺は、二重口縁壺に加飾が見られること、広口壺の口縁部が明かす直線的に立ち上がること、小型丸底壺の口縁部が長く外へ開くことなどから、布留系に含まれ、低脚環は、脚柱部が明確でないものと明確なものが見られることから、庄内系及び布留系のどちらにも含まれよう。以上の各器種の特徴を総括すると、概ね布留式の古い段階に収まり、一部庄内式の特徴を持つ器種が残存する時期と想定される。久住氏のⅡB～C期<sup>(註2)</sup>、蒲原氏の土師本村1式<sup>(註3)</sup>に概ね相当すると考えて差し支えないだろう。

また、5号住居からは2号住居と同型式の広口壺が出土している。4・6号住居の甕は在地系で、頸部が不明瞭ながらも、口縁部が長く外に開くなどの特徴から、2号住居の在地系甕とほぼ同型式と考えられる。以上の点から、2・4～6号住居はほぼ同時期と考えて差し支えないだろう。また、1・3・4号溝は遺物の出土量が少ないものの、その特徴や埋土の状況から弥生後期～古墳初頭のいずれかに収まるものと考えられる。

1号住居はカマドを伴うことから、住居の中で最も新しい。出土した須恵器円蓋の口縁端部に段が残り、口径もやや大きく14cm程度となる。また、須恵器環が出土する状況などと併せても、概ねTK43期<sup>(註4)</sup>の範疇に収まり、土師器類についても重藤氏の9期<sup>(註5)</sup>の特徴を有している。また、P3より出土した遺物も同時期に比定され、この柱穴と同色埋土の調査区中央部の柱穴群は1号住居と同時期に想定してよいものとする。

次に1号掘立柱建物は破片資料ではあるが、ヘラ切りの土師器環が出土しており、2号溝からは須恵器が出土していることから、少なくとも古代以降に想定される。しかし、埋土の類似するP13より出土した陶磁器片の存在から、これらの遺構は中世期の範疇に収まるものと想定される。

さて、以上のような時期比定をもとに、遺構の変遷を整理すると、概ね表1のようになり、これらは切り合いから把握できた前後関係とも齟齬はない。

この時期比定から、弥生後期～古墳初頭にかけて最も集落規模が大きく、数軒の住居群、土坑、溝などが作られ、その後間において古墳時代後期、中世に再び集落として利用される状況が見取れるが、遺構数も少ない状況から、比較的規模の小さい集落の可能性が考えられる。

さて、この複数期の集落群のうち、最も注目されるのが弥生後期～古墳初頭の時期である。調査区より北西約900mの吹上台地上には、弥生前期後半～後期の

第1表 遺構変遷表

時 期	遺 構
弥生時代後期	3号住居、1号土坑
古墳時代初頭	2、4～6号住居
古墳時代後期	1号住居、柱穴群
中 世	1号掘立柱建物、2号溝

拠点集落である吹上遺跡(註6)が所在し、その縁辺部には今泉遺跡(註7)や本村遺跡(註8)などの後期集落の存在が確認されている。また、環濠から環溝居館へと至る過程が見て取れる小迫辻原遺跡(註9)の所在する台地縁辺部には、弥生終末から古墳初頭に該当する本村遺跡や尾部田遺跡(註10)などが見られる。近年の調査から、吹上遺跡や小迫辻原遺跡の台地縁辺に集落が広がっていたことが明らかとなりつつあるが、今回の発掘調査結果は、台地縁辺だけではなく、沖積地の微高地上にも同時期の集落が部分的に広がっていたことを物語っている。また、古墳時代初頭の2・5号住居から畿内系の遺物が出土していることも注目される。畿内系遺物は先述の小迫辻原遺跡に多数見られ、その縁辺部にあたる尾部田遺跡でも畿内系遺物の出土が確認されている。今回の調査結果から、畿内系遺物の受容が、拠点集落のみならず、周辺の小規模集落においても同様に行われていたものと想定される。

そのほか、古墳時代後期後半の住居の存在は、調査区より北東約700mの花月川対岸に位置する月隈横穴墓群(註11)との関係が想定される。これまで、この横穴墓周辺に集落の存在が知られていなかったが、近年の永山布政所跡(註12)の調査で、古墳時代後期の溝跡が確認されており、本遺跡の調査結果と併せて考えると、横穴墓群眼下の沖積地に、当該期の集落が広がっていたことが窺い知れる。今後の調査の進展が期待される。

以上のように、本遺跡の調査結果は、これまで明らかでなかった沖積微高地上の弥生時代～中世の集落の存在を示し、吹上遺跡、小迫辻原遺跡、月隈横穴墓といった大規模な集落や墳墓群とその周辺集落の在り方を理解するうえで貴重な資料を提供していると言える。

## 追記

平成18年1月22日、埋蔵文化財係長を務められた田中伸幸氏が永眠された。見た目も中身も大きな方で、担当者が発掘調査や報告書作成で疲れているときには必ず優しい言葉で励ましてくださる、尊敬すべき係長であった。1年3ヶ月もの闘病生活を余儀なくされたが病魔には勝てず、享年47才という若さで旅立たれた。生前のご指導に感謝申し上げます。ご冥福をお祈りいたします。

- 註1) 横口達也 「IV4 豊原の編年の研究」 『九州縦断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』XXXI中巻 福岡県教育委員会 1979
- 註2) 久住猛雄 「北部九州における庄内式併行期の土器標榜」 『庄内式土器研究』XIX 庄内式土器研究会 1999
- 註3) 藤原宏行 「古墳時代前期前後の土器編年」 『筑紫県立博物館・筑紫郡調査報告書』第16集 筑紫県立博物館・佐賀県立美術館 1991
- 註4) 田辺昭三 『福島古堂址群1』平学堂考古学クラブ 1966
- 註5) 重藤輝行 『石右衛門埴遺跡を中心とした浮原部の古墳時代土器群編年』 『石右衛門埴遺跡1』浮原・ハイパス関係埋蔵文化財調査報告書第12集 福岡県教育委員会 2000
- 註6) 土原和幸 『吹上遺跡1』日田市教育委員会埋蔵文化財調査報告書第42集 日田市教育委員会 2003  
下村 晋 『吹上遺跡2』日田市教育委員会埋蔵文化財調査報告書第52集 日田市教育委員会 2004  
土原和幸 『吹上遺跡3』日田市教育委員会埋蔵文化財調査報告書第57集 日田市教育委員会 2005  
永田浩久・土原和幸 『吹上遺跡』一六次調査概要一日田市教育委員会 1995
- 註7) 渡邊隆行 『今泉遺跡』日田市教育委員会埋蔵文化財調査報告書第37集 日田市教育委員会 2002
- 註8) 若杉竜太 『本村遺跡』日田市教育委員会埋蔵文化財調査報告書第51集 日田市教育委員会 2004
- 註9) 田中純介 『小迫辻原遺跡1』九州縦断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書10 大分県教育委員会1999  
土原和幸 『小迫辻原遺跡2』日田市埋蔵文化財調査報告書15集 日田市教育委員会 2000  
『福島の室 小迫辻原遺跡』日田市教育委員会 1993  
土原和幸・小田富士雄 『福島の居館 小迫辻原遺跡』『福土記の考古学4 豊後国福土記の巻』同成社 1995
- 註10) 行時志郎 『尾部田遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第34集 2001
- 註11) 『第三章古墳時代』『日田市史』日田市 1990
- 註12) 渡邊隆行 『永山布政所跡2次』『平成15年度(2003年度)日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 2004

第2表 出土土器観察表

拝堂番号	遺構名	種類	形状	法 量				調 査			出土	構成	色 調		備 考
				口径	胴径	底径	高さ	角 度	内 面	外 面			内面	外面	
第8区1	1位	腹巻型	杯身	14.0	-	-	14.0	胴幅<ノズル径>同軸ナテ	胴幅<ノズル径>ナテ	BC	良好	黄褐色	黄褐色	ハ少記号	
第8区2	1位	腹巻型	杯蓋	-	-	-	-	同軸ナテ	同軸ナテ	CF	良好	灰色	灰色		
第8区3	1位	腹巻型	杯身	12.0	-	11.1	4.4	胴幅<ノズル径>同軸ナテ	胴幅<ノズル径>ナテ	BC	良好	黄褐色	黄褐色		
第8区4	1位	腹巻型	杯身	-	-	-	-	胴幅<ノズル径>同軸ナテ	同軸ナテ	BC	良好	黄褐色	黄褐色		
第8区5	1位	腹巻型	杯身	-	-	-	-	胴幅<ノズル径>同軸ナテ	同軸ナテ	C	良好	灰白色	灰白色		
第8区6	1位	腹巻型	杯身	11.2	-	12.0	5.9	胴幅<ノズル径>同軸ナテ	胴幅<ノズル径>ナテ	BC	良好	灰白色	灰白色		
第8区7	1位	腹巻型	杯蓋	-	-	-	-	同軸ナテ	同軸ナテ	BC	良好	黄褐色	黄褐色		
第8区8	1位	土師器	高杯	-	-	-	-	ケズリ	ケズリ	BC	良好	褐色	褐色		
第8区9	1位	土師器	高杯	-	-	-	-	ナテ、ケズリ	ケズリ	ABC	良好	褐色	こみ褐色		
第8区10	1位	土師器	甕	-	-	-	-	ハク	ハク	ABCD	良好	赤褐色	こみ褐色		
第8区11	1位	土師器	甕	-	-	-	-	ハク、ナテ	ナテ	ABCDG	良好	黄褐色	こみ褐色		
第8区12	2位	土師器	甕	15.5	-	-	24.1	ハク、ナテ	ナテ、ナテ、ユビオキエ	ACE	良好	こみ褐色	こみ褐色	内面又文付甕	
第8区12	2位	土師器	甕	16.1	-	-	-	ハク、ナテ	ケズリ、ナテ、ユビオキエ	ACE	良好	こみ褐色	こみ褐色		
第8区13	2位	土師器	甕	14.2	-	-	-	ハク、ナテ	ケズリ、ナテ、ユビオキエ	ABC	良好	黄褐色	黄褐色		
第8区14	2位	土師器	甕	15.6	-	-	-	ハク、ナテ	ナテ、ケズリ	ABCD	良好	黄褐色	黄褐色		
第8区15	2位	土師器	甕	15.0	-	-	-	ハク、ナテ	ケズリ、ナテ	ACE	良好	こみ褐色	黄褐色		
第8区16	2位	土師器	甕	15.8	-	-	-	ハク、ナテ、ケズリ	ケズリ、ナテ	ABCDH	良好	こみ褐色	灰白色		
第8区17	2位	土師器	甕	-	-	11.0	-	ナテ	ケズリ、ナテ	ABCDH	良好	こみ褐色	こみ褐色		
第8区18	2位	土師器	甕	23.3	-	-	-	ハク、ナテ、ケズリ	ハク、ユビオキエ	ABCD	良好	こみ褐色	こみ褐色		
第8区19	2位	土師器	甕	21.0	-	-	-	ハク、ナテ	ハク、ナテ	ABCD	良好	黄褐色	黄褐色		
第8区20	2位	土師器	甕	-	-	-	-	ナテ	ナテ	BC	良好	褐色	こみ褐色		
第8区21	2位	土師器	甕	12.0	-	-	-	ヘケケズリ、ナテ	ナテ	ABC	良好	こみ褐色	こみ褐色		
第8区22	2位	土師器	甕	12.5	-	0.9	11.5	ケズリ、ハク、ナテ	ハク、ナテ、ユビオキエ	ABC	良好	黄褐色	黄褐色		
第8区23	2位	土師器	甕	20.3	-	-	-	同軸ナテ	同軸ナテ、ケズリ	ABCD	良好	黄褐色	黄褐色		
第8区24	2位	土師器	甕	-	-	-	-	ハク、ナテ、羽目文	ハク	ABC	良好	黄褐色	黄褐色		
第8区25	2位	土師器	甕	22.5	-	-	-	ハク、ナテ	ケズリ、ナテ、ユビオキエ	ACE	良好	こみ褐色	こみ褐色		
第8区26	2位	土師器	甕	19.2	-	-	-	ハク、ナテ、竹節文	ナテ、ユビオキエ、ケズリ	ACD	良好	こみ褐色	こみ褐色		
第8区27	2位	土師器	甕	-	-	30.4	-	ハク、ナテ	ナテ、ユビオキエ	ACE	良好	こみ褐色	こみ褐色		
第8区28	2位	土師器	甕	17.0	-	-	34.3	ハク、ナテ	ケズリ、ナテ、ユビオキエ	ACE	良好	こみ褐色	こみ褐色		
第8区29	2位	土師器	甕	17.5	-	-	-	ハク	ナテ、ケズリ、ユビオキエ	ABCD	良好	こみ褐色	こみ褐色		
第8区30	2位	土師器	甕	-	-	14.3	-	ケズリ	ハク	ABCD	良好	黄褐色	こみ褐色		
第8区31	2位	土師器	甕	-	-	18.2	-	ハク	ハク	ABCDH	良好	黄褐色	黄褐色		
第8区32	2位	土師器	甕	-	-	12.2	-	ケズリ	ハク	ABCDH	良好	こみ褐色	こみ褐色		
第8区33	2位	土師器	甕	-	-	14.3	-	ハク、ナテ	ハク	ABCD	良好	こみ褐色	こみ褐色		
第8区34	2位	土師器	甕	-	-	13.4	-	ナテ	ナテ	BCDGH	やや良好	褐色	褐色		
第8区35	2位	土師器	小形丸蓋	11.4	-	0.6	7.7	ナテ	ケズリ、ナテ	ABC	良好	黄褐色	黄褐色		
第8区36	2位	土師器	小形丸蓋	12.0	-	-	7.4	ハク、ナテ、ユビオキエ	ナテ	ABCD	良好	黄褐色	黄褐色		
第8区37	2位	土師器	小形丸蓋	13.0	-	12.0	17.0	ケズリナテ	ケズリナテ	ACD	やや良好	灰白色	灰白色		
第8区38	2位	土師器	浅鉢	12.1	-	17.4	11.1	ハク、ケズリ	ナテ、ハク	ABCDH	良好	灰白色	灰白色		
第8区39	2位	土師器	浅鉢	-	-	11.4	-	ケズリ	ケズリ	ABC	良好	灰白色	灰白色		
第8区40	2位	土師器	浅鉢	-	-	16.5	-	ハク、ナテ、ケズリ	ナテ	ACD	良好	灰白色	灰白色		
第8区41	2位	土師器	高杯	-	-	-	-	ケズリ、ナテ	ケズリ、ナテ	ACDE	良好	灰白色	灰白色		
第8区42	2位	土師器	高杯	18.4	-	-	-	ハク、ナテ	ハク、ナテ	ABCD	良好	黄褐色	黄褐色		
第8区43	2位	土師器	鉢	11.6	-	-	3.7	ユビオキエ、ナテ	ユビオキエ、ハク、ナテ	ACE	良好	黄褐色	灰白色		
第1181	3位	赤土	甕	24.3	-	15.0	40.5	ハク、ナテ	ハク、ナテ	ACE	良好	こみ褐色	こみ褐色		
第1182	3位	赤土	甕	25.0	-	-	-	ハク、ナテ	ハク、ナテ	ABC	良好	こみ褐色	こみ褐色		
第1183	3位	赤土	鉢	15.0	-	-	-	ナテ、ユビオキエ	ユビオキエ	ABCD	良好	黄褐色	黄褐色		
第1301	4位	土師器	甕	17.0	-	-	-	ハク、ナテ、ユビオキエ	ナテ、ハク、ユビオキエ	ACH	良好	黄褐色	黄褐色	内面又文付甕	
第1382	5位	土師器	甕	115.2	-	-	-	ハク、ナテ	ナテ、ナテ、ユビオキエ、ナテ	AE	良好	こみ褐色	こみ褐色		
第1383	6位	土師器	甕	-	-	-	-	ナテ	ナテ	ABCDH	良好	褐色	こみ褐色		
第1501	1土	赤土	甕	21.9	-	5.7	22.0	ハク、ナテ	ハク、ナテ、ユビオキエ	ABCD	良好	こみ褐色	こみ褐色		
第1502	1土	赤土	甕	19.8	-	-	27.1	ハク、ナテ	ハク、ナテ、ユビオキエ	ACE	良好	こみ褐色	黄褐色		
第1503	1土	赤土	甕	18.8	-	-	-	ハク、ナテ	ハク	ACH	良好	こみ褐色	こみ褐色		
第1504	1土	赤土	甕	14.0	-	5.0	22.5	ハク、ナテ	ハク、ナテ、ユビオキエ	ABCD	良好	こみ褐色	こみ褐色		
第1505	1土	赤土	甕	39.0	-	-	-	ナテ	ナテ、ハク	ABCD	良好	黄褐色	黄褐色	同一体	
第1506	1土	赤土	甕	-	-	-	-	ハク、ナテ	ハク、ナテ、ユビオキエ	ABCD	良好	黄褐色	黄褐色	同一体	
第1507	1土	赤土	甕	-	-	19.0	-	ハク	ハク、ナテ	ACDE	良好	こみ褐色	こみ褐色	同一体	
第1508	1土	赤土	甕	-	-	-	-	ハク、ナテ	ナテ	ABCD	良好	こみ褐色	こみ褐色	別吉安帯	
第1509	1土	赤土	甕	-	-	17.4	-	ハク、ナテ	ハク、ナテ、ユビオキエ	ACE	良好	褐色	褐色	穿孔	
第1991	1備	赤土	鉢	-	-	-	-	多量ハク	ハク	ABCD	良好	褐色	黄褐色		
第1992	2備	赤土	鉢	-	-	-	-	ナテ	ハク、ナテ	ABC	良好	褐色	こみ褐色		
第1993	2備	赤土	鉢	-	-	-	-	多量ハク	ナテ	C	良好	黄褐色	黄褐色		
第1994	3備	赤土	甕	-	-	-	-	ナテ	ナテ	ABCD	良好	黄褐色	黄褐色		
第1995	4備	赤土	甕	-	-	-	-	ヘケ工風以上者ナテ	ナテ	ABC	良好	黄褐色	黄褐色		
第1996	1備P	土師器	皿	-	-	-	-	同軸ナテ	同軸ナテ	ACD	良好	褐色	褐色	底部へう切り	
第1997	1備P	土師器	手輪土器	2.0	-	-	11.1	ユビオキエ	ユビオキエ	B	良好	黄褐色	黄褐色		
第1998	P13	赤土	甕	-	-	-	-	ハク	ハク	CF	良好	灰白色	灰白色		
第1999	P13	土師器	甕	-	-	-	-	ユビオキエ	ナテ	ABC	良好	黄褐色	黄褐色		
第19910	P3	土師器	高杯	13.0	-	-	-	同軸ナテ	同軸ナテ	ABC	良好	こみ褐色	こみ褐色		

法量単位はcm。( ) 裏身は、残存と採用を表す。

土: A黄褐色 B石灰 C灰 G 赤褐色 D赤色粘土 E白色粘土 F黒色粘土 G黄砂 H砂利

第3表 出土土製品観察表

拝堂番号	遺構名	種類	形状	法 量				調 査			出土	構成	色 調		備 考
				高さ	径	厚さ	外径	内径	内面	外面					
第8区34	2位	土製品	土玉	-	-	-	-	ナテ	不明	AC	良好	暗黄褐色	暗黄褐色		



調査区遠景（吹上台地を望む）



調査区全景（真上から）

写真図版2



①1号住居 (南から)



②2号住居 (北西から)



③3号住居遺物出土状況



④2号住居遺物出土状況



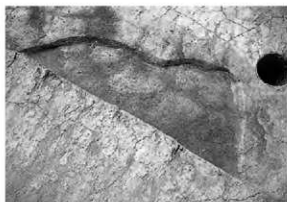
⑤3号住居 (北西から)



⑥3号住居遺物出土状況



⑦4号住居 (北から)



⑧5号住居 (北から)



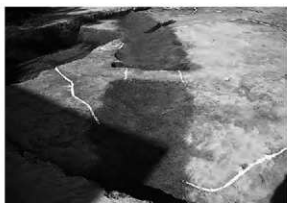
①6号住居 (南から)



②1号土坑 (南から)



③1号土坑遺物出土状況



④1号溝 (南西から)



⑤2号溝 (南から)



⑥3号溝 (南から)



⑦4号溝 (東から)



⑧1号掘立柱建物 (西から)



写真图版4



6-1



6-3



6-6



6-7



8-1



8-2



8-3



8-4



8-5



8-6



8-8



8-12



8-13



8-14



8-15



8-16



9-17



9-18



9-19



9-25



9-26



9-28



9-30



9-33



11-1



11-2



11-3



13-1



13-2



15-1



15-2



15-3



15-4



15-6



15-7



15-9

## 報 告 書 抄 録

ふりがな	いっちょうだいせき
書名	一丁田遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第68集
編著者名	渡邊 隆行・矢羽田 幸宏
編集機関	日田市教育委員会文化財保護課
所在地	〒877-0077 日田市南友田町516-1
発行機関	日田市教育委員会
所在地	〒877-8601 日田市田島2-6-1
発行年月日	2006年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
一丁田遺跡	大分県日田市 大字南豆田 字一丁田 506番地ほか	44204-6	651044	33°19'32"	130°56'0"	20050427 ～ 20050524	330㎡	宅地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
一丁田遺跡	集落跡	弥生時代 古墳時代 中世	竪穴住居6軒。 溝4条、 土坑1基、 柱穴多数	弥生土器  土師器  須恵器	

### 一 丁 田 遺 跡

日田市埋蔵文化財調査報告書第68集  
2006年3月31日

編 集 日田市教育委員会文化財保護課  
877-0077 大分県日田市南友田町516-1

発 行 日田市教育委員会  
877-8601 大分県日田市田島2-6-1

印 刷 (有)中央印刷  
877-0012 大分県日田市洗窓2丁目3-1